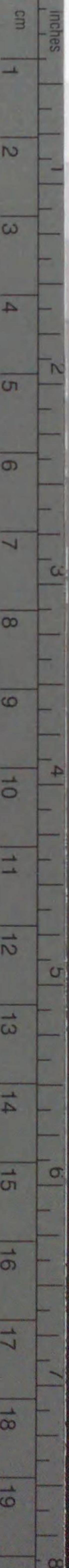


Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



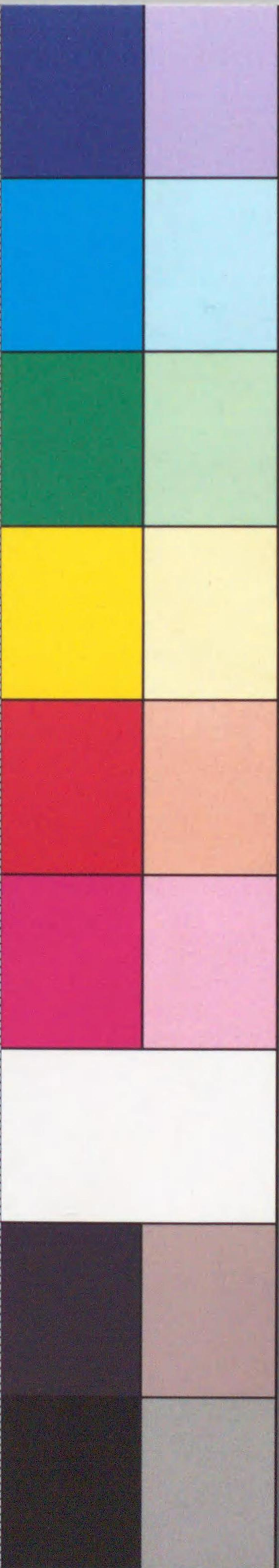
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



調第二四七號

昭和十八年一月

Y994-J8391



\*1200801445412\*

中南米過剩農産物の諸問題

外務省調査局



Y994

J8391

目次

緒言  
要旨

第一章 中南米の經濟的地位……………一頁

  第一節 西、葡兩國の影響による經濟的後進性……………一

  第二節 原料輸出國としての中南米……………三

  第三節 中南米原料資源の特質とその輸出狀況……………六

第二章 中南米に於ける過剩農産物の諸問題……………一二

  第一節 第一次世界大戰後に於ける農業の地位……………一二

  第二節 中南米主要農産物の概況……………一四

  第三節 中南米の農産物過剩供給の諸問題……………三九

結 言……………四二



I 種  
W



\*1200801445412\*



## 緒言

大東亞戰爭勃發以來米合衆國の中南米諸國に對する政策は一段と積極化して來た事は幾多の事例に依つてこれを充分認める事が出来る。メキシコ及びブラジルの參戰、其の他ラテン・アメリカ諸國の對樞軸國斷交等は米合衆國の壓迫及び恫喝に因由してゐる事はいふまでもない。

實に第二次世界大戰を契機として米合衆國が企圖する野望は先づ西半球を米國の支配權下に收めんとする事にあると云つても過言ではない。即ち彼等の呼號する西半球連帶機構を彼等の有利な條件に於て確立し、更にこれを足場として世界支配の野望を逞しうする意圖が看取せられる。而し乍ら米合衆國の意圖する西半球連帶性もこれを經濟的な觀點から眺める時、幾多の難點が横つて居り、之の難點が果して打開し得るや否やに付ては多大の疑問がある。之等の難點の一つに中南米諸國が農業國であるといふ事實がある。勿論、米合衆國は工業國であり、従つて、農業國の中南米と有無相通する事が出来るかと看做されるのであるが、周知の様に米合衆國の工業化の歴史は新しく、また農業部門が米國の工業及び貿易兩部門に比して大きな地位を占めてゐる現狀に鑑み、その圓滑化は期待し得ない。ここに本稿は中南米農産物、特に珈琲、砂糖、小麥、棉花を廻る諸問題をとりあげ、併せて中南米の經濟的特質を論ずる事によつて西半球經濟圏の將來性を検討するに幾分なりとも參考に供せんとするものである。



## 要 旨

中南米諸國の經濟は其の植民地としての産業的後進性並自然的條件の制約により(一)原料並に食糧の生産が國內産業中壓倒的地位を占め(二)且所謂單一耕作國として其の生産物は極めて少數の種類に限定されてゐる特性を有す(例へば中米諸國のバナナ、ブラジルのコーヒー、ポリビヤの錫、ヴェネズエラの石油の如し)

近年に於ける自由貿易主義の衰頹、國防國家の觀念に基くアウトタルキー政策は右種産業狀態の國家の獨立性を危局に導くものである、ラテン・アメリカ諸國民は元來其の國民性として獨立國としての矜持を誇り強國の驥尾に付するを喜ばざるの氣概を有しバン・アメリカニズムに關しても屢々右誇に基く独自の主張をなし必ずしも米國に屈服せざるの意氣を示して居る狀態であるが茲に米國をして最も困難なる立場に立到らしむるものは之等諸國の死活を制する小麥、玉蜀黍、綿花、羊毛其他の主要生産物が米國の夫と競合状態にあることである、而して右は(一)米國自體の經濟的政治的事情により米國內右種農業の他業への轉換は極めて困難なる状態にあるのみならず(二)中南米諸國自身の大規模なる工業化はブラジルの如き一部國家を除き一般に鐵及石炭の基礎資源不足により相當困難なる状態なるを以て之が打開策は米國の努力にも係らず極めて期待薄である。

右實情は中南米諸國の戰時平時を通じ現在並將來に於ける對米對歐並對亞細亞外交政策に重大なる示唆を與ふるものである。

今や第二次世界大戰による輸出市場の喪失並船腹不足により之等諸國の農業生産物は過剩状態とな



りその經濟狀態を極めて悪化せしめて居る。

米國としては之に對し種々の對策を採つて居る様であるが何れも大なる成果を收め得ず一九四〇年のハバナ汎米外相會議に上提せられんとしたる汎米貿易營團設立案の如きも遂に流産となつた。

勿論戰爭繼續中は米國としては戰爭若は輸送基地獲得の爲に或は又ブラジルのゴム、マンガン、ポリビヤの錫、タングステン智利の銅等戰略資源獲得の爲に經濟的損得を度外視して各種經濟並外交工作を進めて居り、從て米國と中南米諸國との外交關係の推移は經濟的關係以外諸般の事情を考慮せざる可からざるも、右は過剰重要農産物の競合關係が兩者外交の將來に及ぼす影響の意義の重大性の過少評價を何等正當付けるものではない。

今前記事情を示す統計の二三を左に例示する。

詳細は本文に據られたし。

一、輸出市場別による中南米主要輸出品の割當（一九三八年）

品名	米國	歐洲諸國	中南米	其他
珈琲	五七%	二八%	一%	一五%
砂糖	七二	二一	二	五
羊毛	八	六四	一	二八
綿花	二四	六八	一	三〇
皮革	二	五五	一	二一
小麦	一	二六	五三	二一
玉蜀黍	一	八一	一	一九

穀物	纖維	其他
小麦	六二	一七
玉蜀黍	六七	一七
其他	七九	四
其他	四	二一

(註) 本表によりコーヒー、砂糖、バナナ、ココア等の商品は主として米國に依存して居ることが解る、而して之等商品の生産國は中米、カリブ諸國並にブラジルであつた、今次戰爭に於て之等諸國が逸早く米國陣營に参加した經濟の一端が窺はれる。一方、小麦、綿花、玉蜀黍、羊毛、皮革等は米國と競合状態にあり從て米國よりも壓倒的に英獨其他の歐洲市場に依存して居ることが判る次第であるが殊に小麦、玉蜀黍等の食糧、飼料は戰後に於ても歐洲市場に依存せざるを得ざるべく世界に一二を争ふ食糧、飼料の輸出國たるアルゼンチンが今日も尙米國の壓迫に屬せず中立政策を堅持し居る事情の一端が窺はれる次第である。

二、中南米主要農産物の生産額及輸出額の世界總生産額並總輸出額に對する比率（一九三七年度）

商品名	總生産額に對する比率	總輸出額に對する比率	商品名	總生産額に對する比率	總輸出額に對する比率
カカオ	三一・〇	二七・八	砂糖	二五・六	四八・四
コーヒー	八八・一	八一・四	小麦	六・八	二八・九
穀物	二〇・〇	七三・六	羊毛	一五・九	一六・一
棉花	八・八	九五	皮革	一	四二・一

(註) 右の表は中南米諸國が之等農産物の生産國としてよりも輸出國として大なる意義を有することを示すものである、從て輸出の杜絶は重大なる國內經濟財政問題を惹起する。

三、中南米諸國輸出品中首位を占むる商品の總輸出額中に占むる比率

國名	商品名	一九三六年	國名	商品名	一九三六年
アルゼンチン	小麦、玉蜀黍	三七・二	チリ	硝酸曹達	二八・二
ボリビヤ	錫、鐵	七一・四	コロンビヤ	銅	三八・〇
ブラジル	コーヒー	四五・五	コーヒー	銅	五八・四



コスタリカ	コーヒー	五七・七	ニカラガ	コーヒー	四五・四
キューバ	砂糖	七二・七	パナマ	バナナ	六〇・九
ドミニカ	砂糖	五六・六	ベール	棉花	二七・三
エクアドル	ココア	二一・〇	サルパドル	コーヒー	八六・二
ホンデュラス	バナナ	六四・七	メネズエラ	石油	八九・〇

(註) 右比率は世界各非工業國に比して相當高率にして中南米諸國が高度の單一耕作國である事實を示すものである。

尙、經濟的事情より見たる中南米諸國の對戰態度乃至對米政策を検討する爲には、農産物以外鑛物資源に付ても検討をなす要あり更に之等中南米諸國の對外輸出狀況のみならず輸入狀況特に米國よりの輸入狀況——物資の種類並其の數量——を併せ検討せなければ完璧を期し得ないのであるが之等は後日の調査に俟つこととする。

尙本調査は當課八百囑託の執筆に成るのである。

昭和十八年一月

調査局 第一課

第一章 中南米の經濟的地位

第一節 西、葡兩國の影響による經濟的後進性

周知の様に中南米諸國は一八二〇年代を中心として達成された獨立運動によつて彼等の母國であるスペイン乃至ポルトガルから分離したのであるが、獨立以前の彼等の經濟的地位は彼等母國のための搾取地域以外の何物でもなかつた。

新大陸の發見以來、ラテン・アメリカに於ける初期の開拓者達が北米大陸のそれと違つて、その多くが金、銀財寶の掠奪を目的とした征服者達であつた事はコルテスやピサロの征服史を見ても容易に理解される所である。征服が一亘り完成された後に於ても本國は専ら金、銀等の鑛山採掘に勢力を集中し、その他の産業促進に意を用ひ無かつた、また本國以外の國との貿易を許さなかつた。

中南米諸國が今日未だに經濟的に後進國の地位にあるのは、母國の中南米植民地に對する斯かる政策に負ふものたる事は極めて明瞭である。寧ろ今日中南米諸國の經濟的後進性の決定的要因はこれに據るものと見ても過言ではない。之等西、葡兩國の中南米に對する政策は中南米獨立成就以後に於いても大きな災を殘した。

植民地經濟の特徴たる資本、勞働力及技術の不足によつて中南米の經濟的發展は著しく阻害された。而して之等の資本勞働力及び技術の不足はその後英、米、佛(主として資本の提供者として)(註一)、及び獨、伊、日(主として勞働力及び技術の提供者として、その他、最下層勞働力の提供者には、往時奴隸として、アフリカより移入せられた黑人階級が居る)(註二)の中南米進出によつて、或



る程度緩和せられたが之等諸國の資本及び技術の進出に伴ふ經濟的權益の獨占化は結局、彼等に左したる利益を與へなかつた。

註一、英國の中南米に對する資金援助は既に中南米諸國が獨立運動を開始してある當時提供せられた。その後獨立達成と共に多額の投資が、都市、鐵道、銀行會社、及び學校の建設並びに設立のために投下せられた。米國の中南米投資に關する歴史は比較的新しく、漸く活況を呈して來たのは今世紀初頭の頃で、やがて前大戰を契機として弗外交の猛威を振ふに至り、英國のリードを粉碎した。しかし世界恐慌の發展と共にそれは漸次停頓状態に陥つたが今次大戰の勃發と共に再び活發化した。

列強の對中南米投資額 (コロンビア管理局貿易部長ヤーマ・ア・プロアガ氏) の統計、海外經濟事情昭和十六年度第十五號所載

國名	一九二八—三二年度		比率%
	金額	比率	
英國	三、六七七	五〇・八	三九・四
佛國	一、〇八〇	一四・九	五二・五
獨逸	八三六	一一・六	六一・九
米國	一、六四九	二二・七	二〇・〇
計	七、二四二	一〇〇・〇	一〇、二九五

註二、中南米の原住民はインデアンであるが、西、葡兩國の侵略以來、殺戮されたか或は、壓迫を蒙つて奴隸の生活を餘儀なくされた。之等下層勞働力の一部はその後ブラジル及びその他の國に於て黒人の移入によつて補充せられた。獨立以前に於ける本國人である西、葡兩國人は別として、その他外國移民の到來を見たのは十九世紀に入つてからであつた。例へば、之をブラジルの例にとつても、一八一七年に二十名の瑞西人が到來し、その後ペドロニ二世(ブラジルの執政者)の植民獎勵政策に刺戟されて獨、白、丁、瑞典、波、佛、露の各國人が入國した。イタリヤの移民が入植を開始したのは一八六〇年の事で、爾來今日まで百五十萬の同國人が入國したと傳へられてゐる。ドイツ移民もイタリヤ移民について數が多く、一八二〇—一八四〇年間に約五十萬の移民が入國した。今、中南米全域に於ける獨伊系市民の數はイタリヤ系六、一五五、三〇〇名、ドイツ系七六五、六〇〇名である。(Baldwin, Hanson, "United We Stand" に據る。) 日本移民は昭和十四年十月一日現在で二三九、七二五名である。

第二節 原料輸出國としての中南米

以上の要因によつて、中南米諸國は依然として原料生産物 (primary product) の生産乃至輸出國の地位に甘じ無ければならなかつた。之の事は勿論、之の地域が世界に於ける有數の原料資源の埋藏地乃至生産地であつた事にもよるのであるが、また別な觀點から資本及び技術の不足は、最も安易な原料生産物の開發乃至栽培といふ第一次的生産に勢力を集中させた原因とも看られるのである。今中南米諸國の原料生産物乃至其の輸出額が世界總額に於て夫々占むる地位を見ると次の如くである。

中南米主要原料品の生産並びに輸出額及び世界總額に於ける割合 (註一)

商 品 名	生産額		輸出額	
	世界に於ける割合	(單位千噸)(一九三七年度)	世界に於ける割合	(一九三七年度)
カカオ	二二・八	三一・〇	一八三・五	二七・八
皮革	二、一八六・〇	八八・一	一、二八二・九	八一・四
穀物	一九、〇一〇・〇	二〇・〇	九、九七〇・〇	七三・六
銅	五、一二八	二一・四	四、一四・九	二五・九
棉	七、二七・七	八・八	三、一八・六	九・五
硝石	四四、六一九・〇	一四・九	一、四四三・七	六一・六
石油	七、一五〇・〇	二五・六	四、〇八七・四	四八・四
錫	二七・四	一三・二	二五・三	一〇〇・〇
小麥	七、〇六一・〇	六・八	四、〇六七・〇	二八・九
羊毛	二七・七・〇	一五・九	一八五・五	一六・一
銀	一一六・〇	四二・七	—	—
金	二、三八九・五	七・二	—	—



(1) 輸出國はボリビアのみ、且つ其の九三%は英國に精鍊の爲に輸出されて居たが最近米國は右錫  
 鑛を目的とする大精鍊所をテキサスに建設した。

(2) 一九三六年の統計。

(3) 單位百萬オンス。

(4) 單位千オンス。

前表によつても知られる様に、中南米は原料生産物の生産國としてよりも、寧ろ輸出國として世界  
 比率に大きな地位を占めてゐた。これは即ち中南米に於て之等原料生産物の國內消費が低く、その大  
 部分を輸出に振り向けた事を示すのであるが、その反面、中南米がこれら原料生産物の輸出に絶對的  
 に依存してゐる事を物語るものである。たとへばチリに於ては一九二九年度に於ける銅、硝石、沃  
 度の三商品輸出額の總輸出額に占むる割合は九一・九%に達し、これら商品に對する生産乃至輸出課  
 税よりの収入が一國財政を賄うに大きな役割を演じた。(註二)

主要ラテン・アメリカ諸國の輸出商品の總輸出價格に於ける割合 (註三)

國名	品名	年			
		一九二九年	一九三二年	一九三七年	一九三八年
アルゼンチン	穀物及び亞麻仁	六二・四%	六一・九%	六三・九%	四二・一%
	肉類	一一・八	一三・三	一三・五	二二・六
	羊毛	七・三	五・九	七・四	一一・〇
ブラジル	總計	八二・五	八一・一	八四・八	七五・七
	硝石	七一・〇	七一・六	四二・四	四五・一
チリ	總計	九一・九	五八・七	七三・二	七〇・四
	硝石及沃度	六〇・六	六〇・九	五三・八	五四・四
コロンビア	總計	二一・三	二二・四	一九・〇	二二・七
	硝石	七・〇	八・五	三・八	五・四
ペルー	總計	八八・九	九二・八	七六・六	八二・五
	硝石	七三・七	七一・二	七八・七	八二・五
キューバ	總計	一三・一	二二・七	一八・二	九・三(1)
	砂糖	一五・〇	四・五	五・九	四・五
メキシコ	總計	一四・三	七・〇	一三・五	一一・九
	鉛	一〇・三	三・三	九・六	九・二
ベネズエラ	總計	一五・八	一一・〇	一四・四	一九・八
	石油及製品	六八・五	六一・五	一四・三	二一・〇
その他	總計	三三・五	六〇・六	七五・九	七五・七
	石油及製品	一九・八	七・七	三三・〇	二九・五(2)
その他	總計	一〇・一	一四・五	一三・九	一七・七
	砂糖	八三・八	八四・四	八・七	七・三
その他	總計	七六・一	八四・五	七九・九	七一・四
	石油及製品	一七・二	九・三	四・五	—
總計	九三・三	九三・八	九五・〇	—	

國名	品名	年			
		一九二九年	一九三二年	一九三七年	一九三八年
チリ	總計	五三・四	三八・七	五三・二	四八・二
	硝石及沃度	三八・五	一九・八	二〇・〇	二二・二
コロンビア	總計	九一・九	五八・七	七三・二	七〇・四
	硝石	六〇・六	六〇・九	五三・八	五四・四
ペルー	總計	二一・三	二二・四	一九・〇	二二・七
	硝石	七・〇	八・五	三・八	五・四
キューバ	總計	一三・一	二二・七	一八・二	九・三(1)
	砂糖	一五・〇	四・五	五・九	四・五
メキシコ	總計	一四・三	七・〇	一三・五	一一・九
	鉛	一〇・三	三・三	九・六	九・二
ベネズエラ	總計	一五・八	一一・〇	一四・四	一九・八
	石油及製品	六八・五	六一・五	一四・三	二一・〇
その他	總計	三三・五	六〇・六	七五・九	七五・七
	石油及製品	一九・八	七・七	三三・〇	二九・五(2)
その他	總計	一〇・一	一四・五	一三・九	一七・七
	砂糖	八三・八	八四・四	八・七	七・三
その他	總計	七六・一	八四・五	七九・九	七一・四
	石油及製品	一七・二	九・三	四・五	—
總計	九三・三	九三・八	九五・〇	—	



尙ほこの場合注意を要する點は中南米各國に於ける輸出品が一、二の生産物に依存してゐる所謂單一耕作國であると云ふ事である。即ち、その代表的なものを挙げれば中米諸國のバナナ、ブラジルのコーヒー、ボリビアの錫、ヴェネズエラの石油であるが、斯かる單一商品への依存性は之等の商品が何らかの要因によつて、例へば氣候の影響とか、輸出相手國の經濟的措置、或ひはチリーの場合に於ける様な天然硝石に對する人造硝石の發明、その他、現在、中南米諸國が深刻な苦痛を蒙つてゐる戰爭による通商路の封鎖等によつて、重大な影響を蒙る危険ある。最近、中南米に於て産業分散化の問題が論議され始めて來たのは結局斯かる影響を回避せんが爲の意圖に外ならない。

しかし、産業分散化、或ひは後に述べる中南米工業化の問題は種々の條件が備はることを必要とし當面の過剩輸出品處理の問題を解決し得ない。

註一及び三 國際聯盟の年鑑及び米國商務省の刊行物に據り編纂せるもの。

註二 Fortune 誌一九三八年一月號は「、、、チリーは約五十年間、云はば外國からの仕送金で生活を營んでゐる消費者の如き感があつた。毎年外人經營の硝石産地から平均二千五百萬ドルの使用料が入つた。硝石産業は政府支出額の六八パーセントを寄與し、地主階級に對する不愉快な課税を免れしめた。それはまた海外から製造品買入れたための外國爲替を供與した。従つて、國內に於て製造工業を起す必要はなかつた。、、、と論じてゐる。

### 第三節 中南米原料資源の特質とその輸出狀況

前節によつて、中南米が原料の生産國並に輸出國としての地位及びその輸出の狀況如何が一國の消長に如何に大きな關係を有してゐたかを觀察して來たのであるが、斯かる傾向によつても、推察できる様に中南米諸國は從來、原料輸出の問題に多大の關心を集中して來た。また中南米諸國は概して輸出超加の傾向にあつたが、これは、彼等が、多額の借款を負つてゐたため、その利拂及び償還の必

要上、輸出超加による収入を必要としてゐたからであつた。(註一)尤も利拂及び償還は世界恐慌以來、中止或ひは漸減の傾向にあつたがこの事はまた一面に世界恐慌が中南米の對外貿易に深刻な打撃を與へた爲、中南米各國が經濟の運営に大なる支障を來した結果に他ならない。從來中南米各國に於ける輸出入制限措置、即ち關稅政策、爲替管理或ひは輸入割當制等の措置は世界でも最も多様多種のものであるといはれてゐるが、これは中南米諸國が如何に輸出貿易に依存してゐるかを示すものとして興味深い問題である。

また英本國等の先進國のやうに海外投資及びその他貿易外收入を持たざる中南米としては、その必要とする工業品及びその他の商品を獲得する道は原料生産物の輸出以外に採るべき道が無かつたのである。

而して原料生産物の輸出狀況であるが今、中南米の輸出商品をその輸出價額の順序によつて列挙して見ると次の通りである。

#### 一九三八年に於ける中南米の輸出商品額及びその割合 (單位千弗)

商品名	輸出額	總額に對する割合%	商品名	輸出額	總額に對する割合%
石	三一七,三六一	一七・三	棉	七六,五三五	四・二
珈琲	二二三,五〇一	一二・七	銅、錫以外の金屬	七三,〇六六	四・〇
肉	一二四,一三七	六・八	皮	六二,五三九	三・四
砂糖	一一五,七〇四	六・三	小麥	六一,四三八	三・四
銅	一〇六,六五九	五・八	亞麻	五九,五七二	三・二
羊毛	九二,一八七	五・〇	玉蜀黍	五九,二九九	三・二



ナット、ワックス、油脂等	三七、七三九	二・一	コ	二一、六七二	一・二
硝石	三一、四七八	一・七	ヘネケン及其他纖維	九、〇六九	〇・五
小麥、玉蜀黍、亞麻仁以外の穀物	三〇、九三五	一・七	金、銀及其他の商品	二四六、二〇三	一三・四
バナナ	二八、一三九	一・五	計	一、八三三、七三一	一〇〇
錫	二四、七九三	一・四	(South American Journal 誌に據る)		
家具用材板、ケアラツチヨ	二一、七〇五	一・二			

この表を見ても直ぐ理解されるやうに輸出額の大部分を構成してゐる商品が、石油、銅等の近代戦争に緊急不可欠な資源を除いて、その多くが珈琲、砂糖、棉花、小麥等といふやうな農産物であるといふ事實である。この事は、中南米諸國に戰略資源が(註二) 缺乏乃至不足してゐるといふ意味ではない。

寧ろ米合衆國が從來依存してゐた東亞の供給地を日本の進出に依つて遮断されて以來、中南米に専ら依存しなければならぬ程、北米圈内に缺けてゐる資源が中南米に埋藏乃至開發されてゐた現状である。ブラジルのマンガン、ギアナのボーキサイト、メキシコのアンチモニー、ボリビアの錫等がこの例である。その他曾つては世界の王座を占めてゐたが、東亞に於ける採掘ゴム發展のため最近衰亡の過程を辿りつゝあつた所、今次大戰の勃發と共に其の價値を再認識され、米國の資本並に技術援助に依つて目下生産増強に追はれつゝあるブラジル等のゴムもこの範圍に屬する。しかし、これらの戰略資源はたとへ、戦争の必要によつてその生産額並びに輸出額が増大するとしても、中南米の總輸出額より見て、その占むる割合に限度があり(尤も、平和的商品の輸出が停止してしまへば、これら資源の輸出割合は高まるも、中南米現在の經濟機構から見てかゝる事は不可能である)、且つ戦後、果し

て、之等資源の輸出の永續性があるかといふ問題も考慮しなければならぬ。例へばブラジルに於けるゴム増産の問題にも戦後に對する不安論が擡頭してゐる現状である。(註三) 斯く視る時、中南米輸出生産物の大部分を占むる農産物の問題は動大な關心を要する問題である。

今、之等の農産物の輸出状況を見ると次の通りである。

輸出市場別による中南米主要輸出品の割合 (一九三八年度)

品目	輸出					先	
	米國	英國	獨逸	其他歐洲	中南米主要國	其他諸國(註)	
珈琲	五七%	七四	一六%	一一%	一	一五%	
肉	七二	一八	一	二九	二	五	
砂糖	三五	二三	一	二三	二	一九	
銅	八	二三	一	一八	一	二八	
羊毛	二	二六	二	二八	一	三〇	
棉花	二	二六	二	二八	一	三〇	
錫	二	一〇	二	二八	一	三〇	
皮	二	一九	二	二八	一	三〇	
小麥	二	一三	二	二八	一	三〇	
亞麻	二	一三	二	二八	一	三〇	
玉蜀黍	二	一三	二	二八	一	三〇	
ナット、ワックス、油脂	二	一三	二	二八	一	三〇	
硝石	二	一三	二	二八	一	三〇	
穀物	二	一三	二	二八	一	三〇	



バナナ	七九	二	七	四	四
錫	二	八四	一	二	四
木材ケブラッチョ	二三	三	二	七	一七
コ	六七	一	二〇	七	二八
コ	六二	四	一五	四	九
織	六二	四	一五	二	一七

(註) 其の他の諸國中には中南米及歐洲の小市場をも含む。

前表からコーヒー、砂糖、バナナ、ココア、繊維等の商品は別として其の他の商品の主要市場が米國以外の地域であるといふ事が理解される。しかも米國依存の前記商品と雖も、之等の商品の輸出に主として依存する國はブラジル(コーヒー)、キューバ(砂糖)、中米諸國(バナナ)、ブラジル(ココア)、メキシコ(繊維)であり、従つて對米貿易は中米諸國、カリブ諸國、ブラジルを除くその他の國々に輸出貿易上の恩恵を施さない。また斯る觀點から前記の諸國が今次大戰に際し、米國陣營に参加するに至つた経緯の一端が窺はれるのである。

結局問題を全體的に觀察する時、之等の平和的商品特に小麦、棉花、玉蜀黍等の農産物が歐洲その他の地域に依存してゐる事が見られ、之が今次大戰の勃發による、その主要輸出市場である歐洲市場との取引が遮断された事によつて、過剰農産物の問題を更に深刻化した原因となつた次第である。勿論中南米に於ける過剰農産物の問題は今次大戰を契機として勃發したものでなく、その淵源する所實に遠いものがあるが、それは次章に述べるとして、過剰農産物の問題は單に中南米の問題たるのみならず、米洲廣域圏(このやうな言葉が假定せらるるとすれば)の將來、また世界經濟の構造的變化の問題にも關聯してゐるため、重大な關心を要する所である。

註一、South American Journal 誌は米國の對中南米貿易に關し「、、、この四、五十年間の歴史を顧みること中南米諸國が債務及び利子の支拂をなし得たのは、之等の中南米諸國の貿易が大出超であつた時か、或は國際收支が有利なるやうに、新たな借款によつて資金を輸入し得た時に限られてゐる、」と論じてゐる。

註二、一九三九年一月七日、米國陸海軍軍需委員會は戰時に際し米國內に於て調達困難にして且つ嚴重なる貯藏及び配給統制の手段を必要とする左記の十七品目の資源を戰略資源(Strategic Material)と名付け、之等資源の獲得、貯藏及び配給統制の諸政策に乗り出した。

- |            |            |           |
|------------|------------|-----------|
| (1) アルミニウム | (7) 錫      | (13) 生糸   |
| (2) アンチモニー | (8) 雲母     | (14) 羊毛   |
| (3) クローム   | (9) 水銀     | (15) マニラ麻 |
| (4) マンガン   | (10) 石英水晶  | (16) キニラネ |
| (5) ニツケル   | (11) 光學ガラス | (17) 椰子殼  |
| (6) タングステン | (12) ゴム    |           |

註三、Editorial Research Report 誌(一九四二年第二號)はその誌上に於て

「米國が新しく大規模にブラジルに於てゴムの栽培を奨励し、而して後になつてまた、蘭印、マレー等の東亞のゴム資源に振り返るやうな事をすればひさり馬鹿を見るのはブラジルばかりである、」と論じてゐる。また米國關稅委員會のフランク・ワーリントン氏も同誌上に於て「ゴムの生産額が國際委員會による統制を必要とするほど大なるものならば實際ゴムの生産が増大した曉、如何なる事態があらはれてくるだらうか、現在、米國が棉花、砂糖、小麦、玉蜀黍等に直面してゐる同じやうな問題を他の商品にも波及せしめた場合、米國はその責任に應じ得る用意があるだらうか、」、兎に角南米に於てゴム栽培計畫に乗り出す前に事態の周到なる検討が必要とせられる程、之は重大な問題である」と述べてゐる。

之に關して興味ある問題は一九四二年十月十九日米國副大統領ウォーレスが新聞記者の會見の席上、現在増産をはかりつつある人造ゴムはその生産費の高價と天然ゴムの優秀性を考慮し之が生産の制限をなすであらうと述べてゐる事である蓋し、之は戰後に於ける東亞のゴム資源に對する含みもあるだらうが、夫れ以上に現在執拗なる米國の要請にしたがつて天然ゴム増産に従事してゐる中南米諸國が戰後に於ける人造ゴム生産力の増大を恐れて、其の生産擴充を躊躇するのに豫防線を張つ



## 第二章 中南米に於ける過剰農産物の諸問題

### 第一節 第一次世界大戰後に於ける農業の地位

前章に於て中南米が世界經濟に於て占むる經濟的地位が原料生産國乃至輸出國である事、そしてまた之の經濟的後進性の故を以つて今次大戰による輸出貿易の阻害に直面して全面的危機に瀕してゐる事をも併せて見て來た。

前項で述べた様に中南米が現在まだ農業生産國である事實、特に珈琲、砂糖、棉花、小麥等過剰商品の生産國たる事の爲、目下深刻な危機に遭遇してゐる事態は今次大戰を契機として新たに生じたものではない。勿論今次大戰は事態の深刻化を一段と増大した事は明白な事實であるが、その根原は更に遠き昔に發してゐるものであることは無視できない。

第一次世界大戰によつてすべての經濟機構を攪亂された世界各國は一九二〇年代に入ると共に産業合理化及び其他の手段を通じて立直りを見せ、更に一九二〇年代の末期に至り、大戰にあつて最も甚大な打撃を蒙つた歐洲諸國の經濟状態が戦前の状態以上にまで復活すると、世界農業界に次の如き傾向が顯著になつて來た。

- (イ) 従來の食糧品輸入國において生産増大をきたし、従つて、輸入の減少傾向が表はれて來た。
- (ロ) 食糧品輸入國は食糧自給自足のため獨善的方策を採つたに反し、輸出國では其の共同利益擁護のため、反對に諸種の國際的協同政策を主張した。(註一)

- (ハ) 農産物輸出國が前述の國際的統制を進めた結果、農産物のストックはごちらかど云へば大體に於て減退傾向を見せたが、若干の農産物については却つて増加した。
- (ニ) 従つて國際的には農産食糧品の輸出入の著しい減少となつた。
- (ホ) 世界の農産物市場がこのやうに切斷され、輸入國が自給策に趨つた結果、世界の農産物價裕が攪亂され、國によつて、著しい開きを見せるに至つた。

今第一次世界大戰前に於ける世界重要農産物の生産額と大戰後のそれとを比較して見ると次の通りである。

世界重要農産物の生産額 (年平均單位百萬噸)

品目	一九〇九—一三年	一九二一年	一九二〇—二四年	一九二五—二七年	一九二八年
小麦	八二・二	七五・二	八八・七	九二・三	一〇〇・八
裸麥	二六・一	一三・八	二一・一	二二・八	二二・四
大麥	二八・七	一六・七	二七・六	三〇・四	三五・八
燕麥	五二・一	三九・二	五二・〇	五四・八	五七・六
玉蜀黍	一〇二・九	八七・四	一〇八・〇	一〇九・四	一一四・〇
米	七七・五	七四・二	八三・二	八五・一	—
馬鈴薯	一二八・六	六七・八	一二八・八	一三七・一	一四一・〇
甜菜糖	六九・七	四八・八	五七・〇	七二・八	七七・二
甘蔗糖	九六・〇	一一五・五	一三九・〇	一六〇・八	一六六・〇
棉花	四八・四	三〇・〇	四三・三	五〇・六	五〇・一

既に一九二〇年代に顯れて來た之の農産物の過剰傾向は更に一九三〇年の世界恐慌によつて拍車を駈けられた。



この農業恐慌が農産物輸出國特に中南米諸國に甚大な打撃を與へた事はいふまでもない。之れ迄、米合衆國が中南米に與へてゐた借款乃至投資は中南米の輸出不振に據る對米債務不履行を理由として停止状態に陥つてしまつた。之はまた中南米の經濟界に大きな打撃を與へた。

此處に於てか世界及び中南米に於ける過剩農産物輸出國が採つた手段は國際的協同生産制限乃至輸出統制であり、國內的には貿易管理であつた。

(註1) Eugene Staley 氏の著 "Raw materials in peace and War" に於て「國際原料經濟の好景氣は一九二〇年代の半にして突然中斷せられた。夫にも拘らず、この排口を原料不足國の原料消費促進に求める努力はなされず、反つて原料危機が原料配分に於ける從來の不均衡關係を助長したのであつた。即ち一九二四年より一九二九年に至る期間は個人的制限と個人獨占協定とによつて過去の原料好景氣を維持せんとする努力がなされた。」と論じてゐる。

## 第二節 中南米主要農産物の概況

次に中南米に於ける主要輸出農産物である珈琲、砂糖、棉花、小麥等に對し一九三〇年以來採られた諸對策及びこれら商品の生産並びに輸出狀況を見やう。

### (イ) 珈 琲

先づコーヒー産業の特質に關し、前掲 Eugene Staley 氏の著 "Raw Materials in Peace and War" に於て次の如く述べてゐる。

- (一) 新たに植を付けられたコーヒーの木は六、七年後に始めて實を結ぶといふ事實がある。その間、追加的植付を刺戟した市場状態は根本的に變つてしまつたかもしれない。(註二)
- (二) コーヒーの消費は價格の變動に對して割合に動搖しない。それ故に價格は大豊作に對應する購買を誘致せんが爲には、全く決定的に下落しなければならず、一方收穫が不足の場合には價格は激しく騰貴する。即ちコーヒーの需要は弾力性が無い。(註三)

(三) 年々コーヒーの木は生長には甚しい變動がある。天候に左右されるのみならず、「收穫の周期性」さへ存在する。

それは大豊作の後にはコーヒーの木は衰へ、且つ通常それは次の大豊作を齊すべき惠まれた天候に應ずる様になるまで二、三年間平均收穫高以下しか生産しないといふ事實から生ずるものである。以上のコーヒー産業の特徴を見る時、コーヒー輸出に依存してゐる中南米のコーヒー生産國就中世界最大のコーヒー生産國たるブラジルが如何にコーヒー生産の動搖性によつて深刻な悩みを抱いてゐたかが推察される。

コーヒーが西半球に始めて紹介されたのはルイ十四世時代と傳へられるがブラジルに入つたのは一七二三年フランスの移民達の手になるもので、最初アゾマン溪谷に入り、後、南部地方の海に臨んだエスピリト・サント州やリオ・デ・ジャネイロ州などに移り更になほサン・パウロ州に進んで行つた。現今サントス地方がその中心地である。

ブラジルの珈琲栽培はナポレオン戦争以來、急速な進歩を見せ始めたが、一八二〇年代には世界珈琲生産額の一八%、一八六〇年代には同じくその五〇%、更に一九〇〇年代には七五%に増加したのであつた。

所がコーヒー樹の植付増加程コーヒーの需要が増加しなかつた事と過度の生産額増加により事態は悪化し、その結果十九世紀末に深刻なコーヒーの不況を招來し、そのためコーヒー園の所有者の多くは破産に陥つた。



斯くして、ブラジルに於て初めて種々の價格安定政策が採られるに至つた。即ちサン・パウロ政府は一九〇五年の終りにコーヒー輸出に對して税を課し、其の利得金をコーヒー價格安定に使用した。サン・パウロ州は一九〇七年中コーヒーを買ひ續け、一九〇八年には豊作が豫想されたので、在庫品の市場に出るのを抑制するために外國銀行家から資金を借りた。

之等の價格安定政策は一應その目的を達した。然し乍ら、一九三〇年の世界經濟恐慌に續く數年間に新しい木が成長するにつれ、過剰生産能力がコーヒー産業の諸問題に更に問題を附加した。これはブラジルが餘りにも多くコーヒーに依存してゐる單一耕作國であつたからである。實に一九三〇年以來コーヒーの問題は世界不況と大收穫の再來に直面して、その滞貨を整理するといふ問題になつた。之等の事實に原因して、コーヒー輸出額のブラジル總輸出額に於ける地位は低下し、コーヒー輸出額は一九二九年の總輸出額の六九%から一九三八年の四五%に減退した。また價格もこれに従つて低下し、例へば「リオ七號」と呼ばれるコーヒー品種は一九二九年の一封度一五仙<sup>10</sup>から一九三三年に八仙<sup>10</sup>、一九三八年に五仙<sup>10</sup>に迄、惨落した。然しこの輸出及び價格の低落はヴェネズエラ、コロンビア、カリブ海諸國からの競争に一部原因するものである。

ブラジル政府はコーヒーの供給過剰による打撃を緩和せんが爲、生産制限に着手した。而し生産制限といつても他の諸國が棉花、小麥、その他諸商品に適用した様な制限方法は監督困難のために實行し得ると考へられないため、收穫されたコーヒーが中央倉庫に運搬された後に、それを焼却する方法に訴へた。之の爲、ブラジル政府は最近十ヶ年間に焼却した分だけで五億弗の損失を蒙つたのである。(註三)また之と共にブラジルのコーヒー賣上高は一九二九年の一四、二八〇、八一五袋——三三

三、八四二、〇〇〇弗から一九三八年の一七、六三八、〇〇〇袋(數量の増大は政府が輸出税を縮少して他國の競争に對抗した爲めである)——一三四、五七八、〇〇〇弗に減少した。一方ブラジルの之の大犠牲によつて、コロンビア其他のコーヒー生産國は經濟不況に際しても比較的小なる犠牲でやつて行く事ができた。兎に角ブラジルの場合はコーヒー世界生産額の六九%を占むる大生産國であること、世界需要額が固定してゐること、且つブラジルの單一耕作國たる弱點のため(註四)一方面的な生産制限政策である焼却の犠牲を甘受する以外に道が無かつたのである。

一九三八年度に於ける中南米諸國に於けるコーヒーの輸出割合

輸出總額に對する比率	仕向國	輸出總額に對する比率
五七%	米國	五七%
二一	獨逸	一六
五	佛國	五
四	和蘭	三
四	瑞典	三
二	英國	一
二	其他國	一五
一	其他	三
三	其他	三

(海外經濟事情昭和十六年下半年分第十五號による)

他方米洲内に於てはコーヒーの輸出を制限するため中南米の九ヶ國によつて一九三六年十一月に協定を結んだが之の協定によれば各國政府は彼等が洲内生産品を購入せんとする點に價格を定め、且



コーヒー消費奨励運動を参加国が行ふべきことになつてゐた。然し、實際的な効果は尠かつた。

中南米主要コーヒー生産國の輸出額 (千佛噸)

サルバドル	ドミニカ	ニカラガ	メキシコ	ハイチ	グアテマラ	コスタリカ	ブラジル	コロンビア	ヴェネズエラ	エクアドル	
一九三六年	四九・四	一四・六	一三・一	四二・八	×三六・一	五〇・九	二一・三	八五一・一	二二六・五	六・六	一三・八
一九三七年	六七・六	一一・〇	一五・八	三五・一	×二四・八	四七・五	二六・五	七二七・四	二四七・七	四・六	—
一九三八年	五三・八	八・二	一五・〇	三五・一	×二五・一	四九・〇	二五・〇	一〇二六・八	二五三・七	—	—

(International Trade in Certain Raw Materials and Foodstuffs by countries of Original Consumption, 1938; League of Nations, Geneva 1939) に據る

註 ×印は委託販賣に關する數字

斯くする内に一九三九年九月、今次歐洲大戰が始まり、戦争はブラジルのコーヒーの對歐輸出に大打撃を與ふるに至つた。而して戦争も初期の英佛對獨逸の睨合の状態の時には左したる事も無かつたのであるが、翌年春の獨逸軍の大攻勢による佛國の崩壊と續くバルカンの攻略により、コーヒーの歐洲市場は全く壊滅に瀕した。

コーヒー商品にとつて歐洲市場の喪失は玉蜀黍、棉花等の商品と違つて對歐依存度が比較的尠いだけにその蒙る打撃も小なるやうに考へられるが、頼るべき米國市場も前表に見るやうに總額の五五%以上であるから残りの全部が全部歐洲市場でないとしても確實な所三〇%以上の損失は蒙つたわけである。況て、從來コーヒーは供給過剰の傾向にあつたのであるから、その蒙る打撃の程度には蓋し深刻なものがあつた。特にブラジルの蒙つた打撃は大きかつた。

ブラジルのコーヒー輸出額 (前掲、一九三九年國際聯盟年鑑に據る) (單位千佛噸)

和	伊	希△	佛	芬	丁	白×	埃	獨	南阿		
一九三六年	一一・四	三・六	一九・六	七・〇	八六・二	一七・九	一一・三	二七・〇	三・〇	五三・五	六・九
一九三七年	一〇・一	二・三	一六・〇	五・〇	八一・六	一五・七	八・六	二二・九	二・八	六三・一	六・〇
一九三八年	二二・三	三・四	二〇・八	七・六	八五・三	二〇・〇	一四・六	二四・二	三・三	九一・八	九・二
一九三六年	三・九	一三・六	六・二	五・四	五・一	八・〇	三・九	四・六	三・一	四六九・六	三・一
一九三七年	三・八	一一・六	四・四	五・一	四・八	五・九	三・〇	三・五	二・〇	三九七・四	二・〇
一九三八年	六・三	一三・一	六・五	五・三	六・〇	九・二	三・五	三・五	二・七	五四四・四	二・七

輸出總額 (一九三六年八五一・一千噸、一九三七年七二四・四千噸、一九三八年一〇二六・八千噸) 註 (×) ルクセンブルグも含む (△) 委託販賣に關する數字

此處に於てか、戦争に依る打撃を緩和すべく米洲内のコーヒー生産國であるブラジル、コロンビアを始めとする十四ヶ國及び米國の代表者達が華府に集まり、一九四〇年十一月二十一日、米洲コーヒー協定を締結した。而して、其の協定の主要條項は第一に米洲コーヒー生産國の米國市場に對する一定の輸出割當、第二に、米國以外の市場に對する輸出割當、第三に米國輸入額の小部分を中南米以外の地域へ輸出する割當であつて、第一の米國市場に對する割當額は次頁の通りであつた。かくて、協定の締結を見るや、市況は改善状態を示し、また、コーヒー価格は騰貴し二五%の賣上増加を示した。

然し、大東亞戦争の勃發は戦争を世界的規模に擴大し、切角の協定も船腹不足、その他の要因によつてその效力を失つてしまつた。即ちブラジルの例をとつても、對米輸出割當は月七十四萬袋と定められて居るが、一九四一年度はその半分も引取られず、一九四二年も七、八月の二ヶ月の輸出總額は僅かに五十三萬袋に過ぎない状態である。



ブラジル九百三十萬、コロンビア三百十五萬、コスタ・リカ二十萬、キューバ八萬、エクアドル十五萬、サルヴァドル六十萬、グワテマラ五十三萬五千、ハイチ二十萬五千、ホンデュラス二萬、メキシコ四十七萬五千、ニカラグワ十九萬五千、ペルー二萬五千、ドミニカ十二萬、ヴェネズエラ四十二萬、總額千五百五十四萬五千。

但し米洲總生産額の年平均額はブラジルが毎年破棄してゐる一千萬袋を除外して二千八百萬袋であるから、米洲市場以外を封鎖された今日、一千三百萬袋の供給過剰になる事になる。(註五)

註一、前掲 Engene Staley は別の著 "World Economy in Transit, 1939." に於て、この事に關し「コーヒー生産に關しては、コーヒー樹が植付けられてから五、六年経つて、初めて實を結ぶに至るこいふ特殊な性質があるため、價格の「危険信號」が増産又は減産の必要を豫告した場合、生産者のこれに對する反應が往々過度になる傾向があつた。」「と述べてゐる。

註二、コーヒーの需要に弾力性が無、事に關し、Foreign Affairs 誌一九四一年一〇月號記載の Leslie A. Wheeler の論文「Agricultural Surplus in the Post War World」は小麦、棉花、砂糖、珈琲に對する需要は比較的弾力性が妙。または價格の變動は需要よりも供給の要因によつて支配される。」「従つて價格が下つても、それに應じただけの消費の増加が起らない。しかし、肉その他日常生活品の消費は賃銀や就業の増減に伴ふ。」「と述べてゐる。

註三、前掲 Foreign Affairs 誌 Wheeler の論文に據るに「ブラジルは九年前に七千袋を破棄した」といひ、また前掲 Staley の論文に於るに「一九三一年以來、ブラジルは二ヶ年の平均收穫高に等しいコーヒー量を焼却したといつてゐる、更に John Gunther の "Inside Latin America" に於るに「コーヒーは焼却するに云つても、コーヒーは水を一〇%も含んでゐるので焼却する事が困難で、そのため燃料を使用しなければならず、これがためロセーラの輸入が必要であつた。コーヒー一袋を焼却する場合、輸送、倉庫、労働、燃料の諸費に於て二五仙かかるを見積られてゐるが、かくの如くして、ブラジルは毎年四百萬袋の過剰コーヒーを焼却するために百萬ドルの費用をかけてゐるのである。」「と述べてゐる。

註四、前掲 Staley は Raw Materials in Peace and War に於て、この單一耕作國たる備みを次の如く述べてゐる。「、耕地面積を生産に使用せしめないため、一九二九年以後價格は抑止されずに下落にまかすべきでめつたを論ずる向も

あるかも知れないが、自由放任主義をかやうに適用せんとする人々は、このことがコーヒー産業に對して慘害を招くのみならず、要するにブラジルの財政並經濟的構成がコーヒー産業に依存してゐるため、ブラジルに對しても慘害を招いたであらうといふことを想起すべきである。」「、焼却政策の實例は少々誇張に過ぎてはゐるが、「人間生活を破壊するよりはコーヒーを破壊する方がよい」といふブラジル政府一高官の言に約言されてゐる。」

註五、前掲 Leslie A. Wheeler, "Agricultural surplus in the Post War World" に據る。

(ロ) 砂糖

砂糖は熱帯地方(キューバ、ジャバ、印度等)に生長する甘蔗と温帯地方に廣く栽培せられる甜菜とから製造せられる。

甘蔗糖が西半球に紹介されたのはコロンブスの新大陸發見と時を同じうするが、甘蔗糖は西印度諸島に於て、好適な風土的條件を見出し、一五一五年には早くも米洲産最初の輸出砂糖がスペインに到着した。斯くて、西半球ではキューバ、ポルトリコ、ブラジルが(註一)主要生産地となると共にまた對歐主要供給地ともなつた。一方、東半球ではそれ以前印度が主要産地となり、ついでジャバ及びフィリッピンにも派及した。ジャバの砂糖は西印度及びブラジルの原始的經營と違つて和蘭人の科學的經營によりその收穫高は一八八〇年から一九一〇年までの間に三倍になるといふ成果を作り出した。然し、米西戰爭の結果、西印度諸島が米國の勢力圏に入ると共に米國の農業經營方法が移入され、今日の發展を齎らした。

他方甜菜糖の歴史は比較的新しく、一七八九年ベルリンに於て、最初の科學的實驗工場が建てられた。しかして一八二〇年になつて漸く甜菜糖はドイツの地に確固たる地歩を占めることになつたが、かかる甜菜糖の發展の蔭には政治的要因が含まれてゐる事が無視できない。(註二)かくて幾多の獎勵政



策により甜菜糖の生産は順次増大すると共に、十九世紀の末期にはその奨励金給與の競争も進展し、イギリスの如き自由市場で、保護金を與へられた砂糖のダンピングが行はれるに至つた。

斯くの如く、この新しき砂糖である甜菜糖の意義は歐洲一圓はおろか海を超へて遠く北米合衆國始め、南アフリカ、濠洲にも擴大されたのであつた。

これを消費額の趣移から見ると一八五〇年代には全世界の砂糖消費者中、甜菜糖を使つてゐたものは七分の一に過ぎなかつたが、七十年に入ると全消費者の三分の一が甜菜糖のみを買ふようになり、全世紀の初めにはそれは三分の二となつた。

以上の如く最初甜菜糖が歐洲諸國に栽培されるに至つたのは主として政治的要因に基づくとはいひまた一面彼等甜菜糖栽培者が砂糖を自國內で生産し、従つて海外の砂糖栽培業者の手に利潤を引き渡す必要が無く、且つ彼等甜菜糖生産に課せられる砂糖税は國庫の大きな財源となるし、また甜菜栽培は結局農民の収入を少からず潤はず（砂糖は穀類よりもずっと高價であつたから）といふ經濟的動機からも出發してゐる事も輕視できない。（註三）

斯くて、甘蔗糖、甜菜糖の各生産地は夫々地盤を守りながら、市場獲得に餘念がなかつた。處で生産地間の競争の結果、砂糖の生産額の方がその消費額よりも増大し、歐洲に於ては外國の砂糖輸入に對し高關稅をかけ、一方自國産の砂糖を輸出せんとする傾向が現出して來た。一九〇二年のブリュッセルに於ける砂糖協議會（註四）も斯かる競争を排除せんとした試みに外ならなかつた。

他方甘蔗糖も米合衆國の西印度諸島制壓により、舊い奴隸使用の栽培方法は排除され、技術的改善と共に生産額は一段と増大した。更に第一次世界大戰のため歐洲諸國の甜菜糖生産額が激減するにつ

れて、甘蔗糖は歐洲市場にも進出するに至つた。然し戦後、經濟回復と共に歐洲の甜菜糖は關稅その他の保護政策の援助により従來輸入國であつた國までが生産を奨励し、之のため甜菜糖の生産額は増大した。之の結果砂糖の世界産額は供給過剰の傾向を呈し、種々の地方的制限政策が企てられたが遂に世界恐慌の勃發した一九三〇年キューバ、ドイツ、ジャバ、チッコソロバキア、ポーランド、ハンガリ、ベルギーの生産業者代表がブルツセルに會合し協議した結果チャードボーン (Chadbourne) 協定を締結し、輸出制限、過剰糖棚上等の諸方策を實施したが、實施後最初の二ケ年間は市場改善の傾向が見られるに至つたけれども協定國の總産額が非協定國の總産額に比して小なるため、實質的效果が上らずまた該協定の規定の不備のため、幾多の缺點を暴露した。

かくて該協定の終了期である一九三六年には事態は前以上に悪化したため一九三七年にロンドンに於て開催された國際砂糖會議には世界砂糖の生産並に消費の約九〇%を占むる英米その他二十三ヶ國の政府代表が集まり、輸出國間の輸出制度、輸入國の産糖制限を取極めた。之の輸出割當は自由市場の需要に基準して毎年變更される建前にある事が前の協定と相異してゐたが、之の協定は尠くとも價格の低落防止には寄與した。然し今次歐洲大戰によつて事態は再び悪化してしまつた。特に自由市場に於ける最大の輸入國たる英國が脱落した事のため、特に西半球に於ける甘蔗糖生産國は大打撃を蒙つた。

一方一九四〇年末に於ける世界二十五國の砂糖繰越額は前年の五百萬噸に比し七百萬の巨額に達する現狀であつた。



砂糖世界輸出額 (單位 千噸)

地名	一九二九年	一九三二年	一九三六年	一九三七年
アフリカ	五四二	四九八	六七〇	—
北米	一〇六	四九	五八	六五
中南米	六、六〇四	四、八三五	四、六四八	四、六九一
キューバ	五、〇二九	二、六五九	二、五二〇	二、六三七
亞細亞	三、四二九	二、七四三	二、一〇一	二、三二一
(東印度)	二、四三二	一、五一四	八八四	一、一三六
(比島)	六九六	一、〇一七	九〇〇	一、一三八
歐洲	二、〇三九	一、四六六	一、二三八	一、一九七
(チエツコスロバキア)	五四〇	三九四	一九二	二五九
(佛國)	三〇一	二八三	二二二	二〇一
(獨逸)	二二〇	八一	一八	—
大洋洲	一、〇七一	一、二八三	一、四二五	—
世界總額	一三、七七一	一〇、八七四	一〇、三六〇	一、四一一

輸出國	總額に對する比率	仕向國	輸出總額に對する比率
キューバ	八六%	米國	七二%
ドミニカ	七%	英國	一八%
ハイチ	五%	智利	二%
その他	一%	佛國	二%
		獨逸	一%
		他國	五%

中南米の砂糖輸出割合及び仕向國割合 (一九三八年) (前掲海外經濟事情に據る)

然し、大東亞戰爭の勃發により、從來米國を主要市場としてゐた中南米の砂糖生産國は米國がその砂糖供給源地であつた比島から既に輸入できず、また布哇からの輸入も太平洋が日米間の主戰場となつた爲、之から期待出來ず、従つて對米輸出に關する限り條件が良くなつたやうに考へられるが、船舶不足と英國始め、其の他の市場との貿易が杜絶した現在、前途は決して樂觀できない現状である。今、中南米に於ける主要砂糖輸出國の最近に於ける輸出状況を見ると次の通りである。この他砂糖生産國としてはブラジルを始め中米諸國であるがその數量は左記三國に比して小なるため、統計表から之等を省略した。

また左記の統計表によつてこれを見るも對米輸出額の大きな國、即ち米國市場の分前を享受してゐるのはキューバのみであり他の二國は寧ろ英國向きの割合が大きい。

キューバの砂糖の對米輸出額が多いのは、キューバの砂糖業が米國資本の獨占的經營になる關係上米國市場に於て優先的待遇を受けてゐる事、即ち一九三四年以來兩國間の通商協定によつて優先的關稅(二〇%よりも尠からざる課稅率)と優先的輸出割當(毎年米國消費額の三〇%平均を割當てられる)を享受してゐるためであつて、この輸出割當は大東亞戰爭の勃發以來當然の如く上昇した。

キューバの砂糖輸出統計 (主要輸出先のみ) (單位 千佛噸)

年	白・ルカセ ンブルグ	佛國 a	和蘭△	英國△	佛領 モロッコ	米國△	輸出總額
一九三六年	三三・二	一〇・二	五五・四	七〇九・五	四七・六	一、七四六・六	二、五二〇・二
一九三七年	五二・二	四七・四	二九・一	四九七・〇	五二・三	一、八九五・四	二、六三七・〇
一九三八年	一三八・五	五五・〇	一五六・六	六一〇・九	五〇・九	一、七〇四・六	二、六〇三・八

(前掲國際聯盟年鑑に據る)

△印 委託販賣に關する數字 a 蜜糖を除く



ドミニカ共和国の砂糖輸出統計 (主要輸出先のみ) (単位 千佛噸) (前掲国際聯盟年鑑に據る)

年	白・ルクセンブルグ	佛 國 a	英 國 △	米 國 △	輸出總額
一九三六年	三五・六	三六・五	一一五・一	五三・四	四三四・八
一九三七年	四〇・〇	七二・四	一六二・五	六九・七	四二九・七
一九三八年	—	三八・三	二七五・七	五五・七	四〇五・六

ペルー砂糖の輸出統計 (主要輸出先のみ) (単位 千佛噸) (前掲国際聯盟年鑑に據る)

年	獨 國	和 蘭 △	英 國 △	米 國 △	智 利	輸出總額
一九三六年	二・一	三・二	一三五・七	二〇・一	一〇七・六	三二五・五
一九三七年	三・〇	四・二	一〇五・〇	四七・七	一一二・二	三一五・五
一九三八年	一九・一	〇・一	六二・七	五〇・六	一〇三・一	二四九・九

註一、前掲 Hubert Herring, "good neighbors," によるニコロンパスが西印度に砂糖を紹介したのは一九三三年であるが、ブラジルに始めて齎されたのは一五三二年のサン・ヴィセンテ (São-Vicente) であつた。ついでバハ (Bahia) ヘルナンブコ (Pernambuco) に移り、一六〇〇年まではブラジルは歐洲砂糖の大半を供給した。而して西印度諸島、特にキューバが十八世紀に入つて發展する迄西半球のリードを保つてゐた。

註二、Euogene Staley の前掲 "Raw Materials in Peace and War" による「甜菜糖工業の起源が戦略上生ずる政治的處置と關係のあつた事は興味深い。ナポレオン一世の命令 (一八〇六年十一月) が歐洲大陸に甘蔗糖の主産地たる英帝國支配の土地との通商を切斷した時、ナポレオンは甜菜糖から生ずる砂糖の商業上の供給を作るため抽出技術の改善に對して報酬を提供した。また大なる農業土地所有者の影響で甜菜糖栽培の上に頼る性質と新世界の穀物並に動物質生産物が舊世界の農業と競争を増した事との爲に歐洲の各國政府は甜菜糖生産の奨励の爲早くから財政的方法を講じてゐた。……」

註三、石田龍次郎著「資源經濟地理」食料部門に據る。

註四、國際經濟週報第二十三卷第三十八號特輯「世界大戰と國際商品」……これは戦争による比島その他の東亞よりの砂糖供給を遮斷されたアメリカがその代策として本年度産キューバ糖を買い上げるための市中の自由取引を停止したもので、早くも砂糖の供給逼迫に對する米國の焦慮が見られたのである。……」

(ハ) 小 麥

戦時並びに平時を通じ、重要食糧品の一に數へられる小麥も西半球に關する限り供給過剰の状態にある。何故なら世界に於ける四大小麥輸出國であるカナダ、米國、濠洲、アルゼンチンの内濠洲を除く右三國が西半球圏内に存在してゐるためである。勿論生産額の點から見れば、歐洲圏(ソ聯を含む)が世界總生産高の三分の一を占むるのであるが(今次大戰前)、その消費額が世界總消費高の半分に達するため、供給不足の状態にある。これに反し南北兩アメリカは世界小麥の略ぼ三割を生産するか、それ自身消費する量は五分の一に過ぎず残余の部分を他の大陸に輸出する。その他、濠洲の小麥生産額は全世界の二―三分に過ぎないが非常に多量に輸出し得る状態にあつた。(註一)従つて西半球に於ける小麥輸出状態が今次歐洲大戰の勃發によつて他の商品に比し重大な打撃を蒙つた事は推察に難くない。更にこれを中南米の小麥輸出國であるアルゼンチン、ウルグワイに問題を局限して見るに、カナダ、米國の場合は輸出過剰といつても兩國は共に交戦國であり、従つて戦時に備えて或る程度の需要増が期待され(大戰後食糧は種々の原因に依り不足の傾向にある)且つカナダの場合は英本國及び聯合國の補給基地としての役割を勤め、米國の場合は従來とも生産額は世界第二(第一位はソ聯)にあるにしても、消費額また極めて多量であるため、輸出に供せられる割合は比較的尠く、その影響する所も左したる事無しと考へられるのであるが、中南米の場合は前述した如く輸出其のものが國の經濟に多大の影響力を持つ以上現在の様な大戰による通商杜絶は大きな打撃を與へた。なほ注意を要する點はソ聯及び英領印度の小麥生産額は今次大戰前夫々世界の第一位及び第三位を占めてゐたがその消費額また多量に上るため、その輸出額が僅少である點である。



世界小麥産額 (單位 千噸)

國名	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
英國	九,八八五	九,五八五	九,九〇九	一〇,九六七
ソ聯	三〇,八三〇	三〇,九〇〇	四四,二四〇	—
米合衆	一七,〇四七	一七,〇五八	二五,八三三	—
加奈陀	七,六七三	五,九六六	五,九〇五	九,五二六
アルゼンチン	三,八五〇	六,七八二	五,〇五〇	八,七〇〇
土耳	二,五二一	三,八五三	三,六一九	四,二四八
濠洲	三,九二五	四,一二〇	五,〇九六	四,一一一
伊太	七,六九六	六,一一二	八,〇六四	八,〇九二
佛國	七,七五五	六,九三〇	七,〇一三	九,四〇〇
獨逸	四,六九六	六,一一二	八,〇六四	八,〇九二
ルーマニア	二,六二五	三,五〇三	三,七六〇	四,八二一
世界計	一七,七八〇	一七,六三〇	一四七,九一〇	一三三,六四〇

小麥世界輸出統計 (單位 千噸)

地名及國名	一九二九年	一九三二年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
北米	八,一九四	七,七〇五	四,五二五	六,六六六	三,四九四	—
(合衆國)	二,四五三	一,四九四	六	五一	八八一	二,三六七
(加奈陀)	五,七四一	六,二一一	四,五〇九	六,六一五	二,六一三	三,一〇七
南米	六,七一一	三,四四二	三,九二二	一,七四八	三,九三五	—
(アルゼンチン)	六,六一三	三,四四二	三,八六〇	一,六一〇	三,八八七	一,九四〇
亞細亞	一三二	一八一	一九六	四二三	七六五	—
歐洲	一,四八八	一,七八三	二,六三二	二,四二九	三,一七八	—

(1) 奧地利を含ます  
(2) その他の國を含む (ソ聯を含ます)

(ハンガリ)	四八六	一四四	三三一	五七一	三五八	四三六
(ルーマニア)	八	一〇三	二五二	六一一	一,〇〇〇	八八二
(ソ聯)	—	五五一	七一九	五八	八四六	—
(ユーゴスラビア)	五五四	一三三	三〇	二九四	三二八	一一〇
大洋洲	二,〇五〇	三,三六七	一,九〇四	一,九三四	二,〇二五	二,五二九
(濠洲)	二,〇四〇	三,三六七	一,九〇四	一,九三四	二,〇二五	二,五二九
世界總計	一八,九九三	一七,二六〇	一三,七六七	一三,五九六	一三,七二九	—

(以上の兩統計は延兼數之助著『世界資源論』に據る)

以上の統計によつて明かな如く、アルゼンチンは世界生産額に於て常に五位乃至七位に位置しながら、其の輸出額に於ていつも一位乃至三位を争ふといふ状態であつたのである。之の點からしても如何に之の國が之の種商品の輸出に依存してゐたかが推察されるのであるが、更に上述のコーヒー、砂糖等の商品と相違して、現在最も頼るべき米國に於ても過剰生産の傾向にあつたため、之の事は後述する棉花の場合と同様であるが、之の爲二重の打撃を受けたのである。これと例を等しくするものにアルゼンチンの玉蜀黍、肉類があり、更に戦時に於ける戰略性増大のため、需要の増大を見るも、平時に於て略ぼこれと例を等しくするものにアルゼンチン、ウルグワイ、チリーの羊毛、ブラジルの皮革があつた。従來、兎角、米國・アルゼンチン間の外交關係が圓滑を缺いてゐたのは他に種々の理由もあつたのであるが、以上の經濟的關係が預つて力あつたのである。今參考迄に南米主要國に於ける一般商品の對外輸出狀況を見ると次の通りである。

南部中南米諸國の輸出高 (單位 千弗)

(U. S. Tariff Commission, Bureau of Foreign and Domestic Commerce, 1938.)



輸出總額	米國向輸出		英國向輸出		歐洲向輸出	
	額	全體に對する割合	額	全體に對する割合	額	全體に對する割合
アルゼンチン	四二七,九三二					
全輸出高	八四一,〇八	三,三四二	四〇〇	六九,一二七	八二,二	八,八四八
肉類	五四五,二八		〇〇	九,〇一七	一六,五	一二,七九九
小麦	五二,八七八	四,三〇五	二六,六	一,五九九	三〇	三二,六〇三
亞麻	五三,六六九	二		一六,二二八	三〇,二	三二,五一七
玉蜀黍	四,五七一	五,九九二	一,三二	一一,〇四二	二六,二	二,八八六
計	二九七,八九二					
ブラジル	二九五,五五八					
全輸出高	一三三,一八五	七二,三二五	五四,二	九		四五,〇二八
珈琲	五三,九三二					二九,三七〇
棉花	一二,三五三	八,一七八	六,六二	二		三八〇七
カカオビーンズ	九,三〇〇	五七六	六,二	四五八	四九	七,二六九
皮	二〇八,七七〇					
計	一四〇,七七七					
智利	六七,七七七	一一,四四一	一八,四	二四,六〇五	三六,三	二六,三四四
全輸出高	二九,一六〇					
銅	五,二二二	四		二,八二二	五四,〇	二,二八三
硝石	一〇,一八					
計	一〇,一八					
ウルグアイ	三九,〇八四					
全輸出高	五四,八八六					
羊毛	二二,九三九	四二一	一,七	五,一一四	二,一四	一五,〇一六
肉類	一〇,七九一	八九五	八,三	六,三三四	五,八七	三,〇七〇
皮	四,三三八	一一五	二,六	二,二九	五,三	三,七六四
計	三九,〇八四					

小麦も砂糖の場合と同様、第一次世界大戦當時の價格騰貴によつて刺戟され、更に戦争により歐洲内の生産が減少した爲に、歐洲以外の地域に於ても生産擴張が行はれるに至つたが、特に第一次世界大戦後、歐洲諸國に於て新しい農業保護計畫の實施と生産技術の改善が實施せられるにつれ、小麦の供給状態は過剰傾向を帯びるに至つた。この供給過剰は合理的な食料品要求の意味に於ける世界の小麦生産高の過剰を意味するのではなく、寧ろ他の原料問題と同様に小麦栽培者の大半に充分の利益を保證するやうな高價格が消費者が購買し或は購買し得るより以上に商品が多量に生産されると云ふ事を意味してゐた。(註二)

更にこの小麦の供給過剰は一九三〇年の世界經濟恐慌によつて拍車をかけられた。米國に於てはフーバー大統領の跡を受けてたつたルーズベルト大統領が農業調整政策(A.A.A.)に乗り出し、またカナダに於ては販賣制限と面積の減少政策を採用し、アルゼンチンに於ても植付面積の減少政策を行ふに至つたのは夫々これら供給過剰に對する個人的對策を意味するものであり、また國際的にも一九三〇年以來種々の過剰生産の制限政策が採られ、一九三三年八月にはロンドンに於て、世界二十二ヶ國の代表者により國際協定が調印されたがこの協定は輸出と同様に輸入國をも參加包含せる最初の國際商品協定であつた。然し、之の協定も統制手段の有効性も缺いてゐたため、幾多の困難に逢着し更



に天候が北米諸國の收穫減少に影響を及ぼし、且つアルゼンチンが割當の制限に困難を感じた爲、他の輸出國の許可なくして、遂に割當額を超過させた爲に、一九三五年、事實上、右協定は廢棄された。(註三) しかし一九三八—三九年に過剰ストックが増大し始めると、一九三三年に創設された小麥諮問委員會はロンドンに於て會合し、對策を練つたが歐洲大戰の勃發に會ひ、討議は延期の止むなきに至つた。

更に一九四一年七月ワシントンに於て開催された國際小麥會議に四大輸出國として、濠洲、カナダ、アルゼンチン、米合衆國、最大輸入國として英本國の夫々代表が集まり、前の會議に行はれたよりもつと廣範圍(戰後の問題にも)に協議を行つた。(註四) また一九四二年の七月に入つても再びワシントンに於て前記五ヶ國間に協議が行はれたが(註五) 右會議に決められた規定は暫定的なもので、決定的規約は戰後決められる事になつてゐる。

これら種々の對策にも拘らず前記主要輸出國の過剰小麥は大戦勃發以來引續き堆積し、昨一九四一年九月一日現在に於て十四億三千二百萬ブツセルの多量に上り、即ち世界小麥平均輸出高の約三倍に達したのである。

一九三八年度の中南米に於ける小麥輸出狀況

輸出國	比 率	仕 向 國	比 率
アルゼンチン	九八%	英 國	四八%
ウルグアイ	二	獨逸	一三
		白 耳 義 國	七
		獨逸	六

其 他 露 五 二一

最近に於けるアルゼンチンの小麥輸出額及び輸出先(單位 千弗噸)

年 次	英 葡 △ 和 △ ノル マル	伊 愛 希 △ 佛 芬 丁	白 露 獨 瑞 典 瑞 西 伯 祕	輸出 總額													
一九三六年	五〇	一四六	一〇	三三	二八	一三二	一	二四	二	五二	九三	二二	三、六二〇				
一九三七年	七九	四	一六二	五三	三八〇	九一	五六	一六	二〇	三三	二九五	一二	五三五	一〇	二、九二〇	九五	三、八八七
一九三八年	三〇	二二	七〇	一	二七	一一	二二	四	二九	一一	三	一五	一五五	三	五、六一三	〇	二、四一、九四〇

△印 委託販賣に關する數字 (前掲國際聯盟年鑑に據る)

○印 概算

前記二表に依つて窺はれる様にアルゼンチンの小麥輸出先が歐洲諸國及び同じ中南米圏内に屬するブラジル並びに祕露であるが、之の點他の輸出商品(たとへば玉蜀黍)に比して、惠まれた地位にあるといひゐるが、前述した様に小麥等の國際商品は弾力性が尠く従つて前記ブラジル及び祕露から之れ以上の需要を期待する事できず、歐洲市場の崩壊と相俟つてアルゼンチンにとり大打撃たる事は疑ひなし。

註一 石田龍次郎著 『資源經濟地理—食糧部關』

註二 Eugene Staley "Raw Materials in Peace and War" に據る

註三 Economist (January 25, 1936) 「國際小麥協定による統制の試みは不名譽にも失敗した。一九三四年乃至三五年に大收穫を得たアルゼンチンは、國際協定によつて割當てられた割合に、殆んど注意を拂はなかつた。アメリカは植付面積の統制に嚴重な計畫をなした唯一の國であつた。、、世界の狀勢が改善された事は、殆んど總べて大輸出國たる數ヶ國の不作の連續に歸因する」



註四 前掲 Foreign Affairs の論文は「、、會議の代表者達は、世界の消費者達が戦後、彼等消費者及び生産者に合理的な價格でまた救済の必要ある人々には無料で充分な供給を保證し得らるやう希望を表明した。また輸出國の代表者達は世界市場の均等な分配と同様、現在以上にストックの増大を防止するために、生産統制の必要を認識した。且つ、會議は海外地域に於ける小麥過剩問題は歐洲並其他の輸入國が彼等自身の小麥生産に對する熱意を縮減するならば多分に緩和せられたらうといふ事を認めた、」と論じてゐる。

註五 フェノスアイレス七月三日發同盟電に依れば右の會議に於て次の如き取極が成立したと傳へられる。

- 一、アルゼンチン、濠洲、カナダ、アメリカの四小麥輸出國は戦時における過剩滞荷増大を防止すべく夫々の小麥生産の統制を實施する。
  - 一、小麥一億ブツシエルを戦火により被害を蒙つた地方救済のためにプールする。但しこれは必要なる場合さらに増加せしめ得る。
  - 一、前記の四小麥輸出國は戦後においても生産統制を行ひ、イギリスを含む全協定國は戦後の混亂防止のため小麥價格安定に協力する。
- 更にストックホルム七月九日發同盟によれば右會議に關しイギリスに於て發表された白書によれば關係諸國の小麥貯藏量の最少及び最大限度を次の如く認めてゐる。(單位百萬ブツシエル)

	最少 限	最大 限
アルゼンチン	三五	一三〇
濠洲	八五	一八〇
加 奈 陀	八〇	二七五
米 合 衆 國	一五〇	四〇〇

(二) 棉花

棉花も前の小麥と同様米洲全域では生産過剩の状態にある。今一九三九—四〇年に於ける各經濟圏別の棉花需給状態を見ると次の通りである。

一九三九—四〇年度の各經濟圏に於ける棉花の生産及消費額 (單位千俵)

經濟圏	棉花生産額	棉花消費額	過 不 足
亞 細 亞 圈	五、五六二	七、五七六	(-) 二、〇一四
米 洲 圈	一五、六一〇	九、七〇五	(+) 五、九〇五
歐 洲 圈	二、一九五	一、一八〇	(-) 八、九八五
シ 聯 圈	四、〇〇〇	四、〇〇〇	—

之によつても明らかな様に米洲圏の過剩棉花を亞細亞圏と歐洲—阿弗利加圏とで、如何に配分を受くるかに問題がかかつてゐるといふ事ができよう。(註一)

米洲圏の棉花生産國といへば先づその産額世界第一を誇る米合衆國を始めとし、これに續いて、その産額は米國に比し、急に落ちるも、中南米では第一位を占むるブラジル(註二)その他ペルー、メキシコ、アルゼンチン、ハイチ等の諸國であるが、問題は米國の産額及び輸出額が世界總額に於て餘りにも大きな地位を占むるため、今次大戦によつて、米洲棉花生産國は前記小麥商品以上の打撃を受けたのである。

世界に於ける棉花國別生産額 (單位千俵—米棉實俵、其他棉四七八封度俵)

國 名	一九三七—三八年	一九三八—三九年	一九三九—四〇年	一九四〇—四一年
米 國	一八、四二二	一一、六六五	一一、五一六	一一、五六五
ナ ラ ジ ョ	二、〇一五	一、九八九	二、〇九四	二、三〇〇
支 那 (滿洲を含む)	二、三二三	九〇〇	六二七	一、〇〇〇
印 度	四、九四二	四、五七四	四、四二〇	四、五五〇
埃 及	二、二五九	一、七〇三	一、七八五	一、八五〇
ソ 聯	三、七〇〇	三、八〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇
其 他	三、〇九四	二、八七三	二、九二五	三、〇一〇
合 計	三六、七四五	二七、五〇四	二七、三六七	二九、二六七

備考 紐育棉花取引所週報に據る。米棉はメキシコ棉の輸入を含む。



米國棉の一九三九—四〇年に於ける輸出高は六、二一七千俵で大體世界棉花輸出額の約五〇%を占めた。しかし一九四〇—四一年には歐洲市場の全面的閉鎖に遭遇して、輸出状態は悪化し、尨大なストックを擁するに至つた。

一方、中南米諸國の棉花輸出状況を見ると次の通りである。

一九三八年の中南米諸國に於ける棉花輸出額及び仕向國割合 (輸出總額七六、五三五千弗)

輸出國	仕向國	比 率
ブラジル	獨逸	七〇%
ペルシル	獨逸	一八
メキシコ	佛國	五
アルゼンチン	伊國	五
ハイチ	米國	一
其他	其他	一

之の表を見ても、今次大戰前中南米に於ける棉花生産國の輸出市場が獨逸、英國等の歐洲大陸であつた事は明らかに理解される所であるが、之に據りてもまた之の主要市場たる歐洲市場が第二次歐洲大戰の第二年である一九四〇年に入つて壊滅に瀕するや、多大の打撃を蒙つた事も容易に理解される所である。

最近に於けるブラジル棉の輸出高 (單位四七、八封度俵)

輸出先	一九三九年	一九四〇年
本國	二、〇〇〇	八、〇〇〇
英國	九一、〇〇〇	四四、〇〇〇
歐洲大陸	一六五、〇〇〇	二、〇〇〇
東洋	一一四、〇〇〇	一九七、〇〇〇
合計	三三五、〇〇〇	三二〇、〇〇〇

(兩年度共八月一日より十一月三日迄の分)

各國別ブラジル棉花の輸出統計 (單位千佛噸)

國名	一九三六年	一九三七年	一九三八年
獨逸	三七・一	六八・八	一〇〇・六
埃地利	一・〇	一・七	二・七
白、ルクセンブルク	五・九	五・〇	六・三
佛國	一四・八	一五・五	二九・三
伊國	三・〇	六・九	五・五
和蘭	四・二	三・〇	六・六
波、ダンチツヒ	二・八	六・七	四・一
葡國	二・四	六・八	六・一
△英	六九・七	五三・三	五二・五
チツコスロバキア	二・二	五・二	一・三
支那	三・三	二・一	三・四
日本	四二・五	...	...
日	〇・二	五・三	〇・三
米	二〇〇・三	二二六・二	二六八・七

(前掲國際聯盟統計年鑑に據る)。註 △委託販賣に關する數字。a 層を含む。

最近に於けるペルー棉の輸出高 (單位四七、八封度俵)

輸出先	一九三九年	一九四〇年
米	三、〇〇〇	四、〇〇〇
英國	一〇八、〇〇〇	二二、〇〇〇
歐洲大陸	四二、〇〇〇	七、〇〇〇
其他	二、〇〇〇	一八、〇〇〇
合計	一八二、〇〇〇	九六、〇〇〇

註 兩年度共(八月一日—十一月三日迄の分)



ペルー棉花の各國別輸出統計 (單位千佛噸)

國名	一九三六年	一九三七年	一九三八年
△獨逸	一八・八	一八・六	一四・五
△地利	〇・一	〇・二	〇・一
白、ルクセンブルク	一・五	二・二	一・九
△英	三六・六	四二・四	三九・二
佛	一・九	二・八	一・五
△和	一・六	二・三	一・九
日本	一一・一	八〇・六	六九・五
輸出合計	八〇・四	八〇・六	六九・五

(前揚國際聯盟統計年鑑に據る)  
 註 a 層を含む △委託販賣に關する數字

前表によつて推察される如く、中南米の主要棉花生産國であるブラジル、ペルーが戦争第二年の一九四〇年にこれまでの主要市場であつた歐洲市場を喪失して、打撃を蒙つたが、それでも對米及び東洋市場向きの輸出増加に據つて、歐洲市場喪失の打撃を幾分なりとも緩和してゐる事實が見出される。從つて、之の點よりして、一九四一年末の大東亞戦争の勃發は残る唯一の主要市場である東洋市場を完全に失はしむるに至つたため、彼等の蒙つた打撃の深刻さは蓋し想像に余りある。残された僅かの市場である米國としても、米國自身が前記のやうに生産過剰の傾向にあるので(しかし、戦争の勃發は事態を大分變更させたが根本的事情に變りはない)、彼等の過剰ストックを全部前記市場に肩代りして消費するといふわけにはゆかない事は理の當然である。

勿論、米國は西半球連帶政策、即ち彼等の所謂中南米懷柔政策の立前と戦争に依る或る程度の逼迫から、中南米の過剰棉を購入せんと努力してゐるが、問題は結局船腹の問題にかゝつてくる。

棉花の問題も前記の諸商品と同様一九三〇年の世界經濟恐慌に端を發するものである。世界に於ける主要棉花生産國である米國はこの恐慌の危機を切抜けん、植付面積制限政策その他、種々の救濟手段を講じたが、この結果、反つて、ブラジル棉の輸出増大を齎らした。このブラジル棉の輸出増大の原因は價格の低廉なる事にあつたが、その他、獨逸とのバータ貿易、對日求償貿易も大きな原因をなしてゐる。然し、戦争はこれら兩市場を喪失してしまつた。

註一 昭和十六年三月三十日付東京朝日新聞所載「大戰下の世界綿業活動」に據る。  
 註二 前掲 Hubert Herring, "Good neighbors" に據ればブラジルの棉花は十八世紀末頃、一時その輸出額は米國の棉花輸出額を凌駕したが綿織機の發明によつて間もなく米國にリードを奪はれた。またコーヒー産業の勃興によつて國內の棉花生産は輕視せられるに至つた。しかしコーヒー景氣の停止と共に再び棉花生産は拍車をかけられ、その生産額は一九三〇年の五〇萬バール(Bale)から一九三八年には約二百萬バールに激増し、これと共に輸出額も約十二倍の激増を見せ、一九三八年には約百萬バールに達した。この躍進の原因には勿論、前記コーヒー産業の不況が介在したことは争はれぬがその他、米國の棉花が農業労働者生活水準上げのため、昂騰したことや、ドイツとのパートナー取引による大消費が有力な原因と看做されてゐる。

第三節 中南米の農産物過剰供給の諸問題

前節迄に、中南米の世界に於ける經濟的地位が原料の生産並に輸出國である事實、即ち中南米が經濟の後進國たる特徴が今次大戰の勃發に際會し、大きな苦惱の原因となつた事實を見て來た。

次に今次大戰は原料の生産並に輸出國である中南米の經濟的特質に如何なる變化を及ぼすだらうか、即ち前大戰當時も中南米の經濟的性格に大きな變化を及ぼしたが、更に、今次大戰が中南米に如何なる變化を及ぼすだらうかといふ問題を考究して見たい。但し、この問題を考察する前に、今次の世界大戰が長期に繼續され、從つて好むと好まざるに拘らず、中南米の對外貿易は歐洲及び東洋市場



から隔離されるだらうといふ事實を考慮に入れて述べて見やうと思ふ。

前述した如く、中南米が原料の生産並びに輸出國である特質が今次大戰に遭遇し、大きな苦痛を嘗めさせられた事實は今に始まつた事柄でなく、遠き昔に遡るものであるが、更に今次大戰によつて、之の中南米原料過剰農業生産の惱は愈々深刻化し、従つて何とか其處に打解の道がとられなければならない破目に至つてゐる。

之を米國側から見れば西半球連帶性ソリダテに對する工作の手前、可成りの犠牲を忍んで、中南米農業の過剰生産を解決しなければならぬだらう。即ち中南米と競争的性質を有する前記、棉花、小麥、玉蜀黍、生肉、羊毛を米國に輸入する政策をとるか、左も無ければ中南米の經濟的性格を變化させる、即ち中南米を農業國から工業國の地位に向上發展させるか或は、ブラジルの場合のコーヒーの様な單一耕作物に對する依存性を、他の種類の商品に分散化して過剰生産の惱を軽減せしむるに協力するかの方法を探らなければならぬだらう。然し工業化と言つてもその發展進歩には相當の準備並に基礎工作が必要であり、又産業の分散化も商品の需要性、或は國內産業の諸條件を考察しなければならずここに多大の難關が横つてゐる。然し、兎に角これらの傾向は戰時の壓迫を蒙つて、或る程度前進するものと見られる。

また、中南米側に於ても、對外輸出の困難から來る農産物過剰供給の問題を回避するため中南米相互間の貿易が發展するものとみられてゐるが、事實最近に於ては、これら諸國間の貿易額は増大した。(註一)

中南米に於ける過剰農業生産物を處理すべく米國の企圖した方法として一九四〇年夏のハヴァナに

於ける汎米外相會議に上呈せられんとした資本金二十億弗を以てする汎米貿易營團の設立案がある。この案は獨逸の中南米に對する商業上の侵略を排除すると共に中南米に於ける過剰農産物を處理せんとするものにして、年額約五億弗の損失を犠牲にせんとするものであるが、(西半球の貿易額は戰前純輸入高約三十億、純輸出高四十億弗にして、その内農産物の輸出高は約五億弗に達した)、その計畫に種々の難點があつたため米國內に反對があり、また南米諸國に於ても右の案は必然的に米國の援助を必要とするため、米國の中南米に對する經濟的制覇の手段なりと反對論が起り、結局成立發展を見ずにしまつた。

また一方は中南米工業化に對する米國側の企圖は輸出入銀行による對中南米融資活動及び技術援助と相俟つて目下、積極的に行はれんとしてゐるが、之が急速に進展するかは疑問である。何故ならばラジルを除く、爾余の中南米諸國に於て、鐵、石炭等の工業に對する基礎資源が缺除してゐるため、工業の進歩發達が阻害されてゐるためである。之がため、工業製品の原料が主として國內農産物で賄はれる所謂輕工業が活況を呈するものと見られてゐる。之は一つには過剰農産物の處理にもなり、また必需工業品の供給にもなるから米國及び中南米諸國にとつて可成り好都合である。然し、前述した如く、中南米諸國は農産物の輸出國であり、國內に於ける右農産物の生産者である農産階級はこれ迄牢固たる地盤を國內に持つてゐたため、國內の工業化に全面的に贊意を表するとは考へられない現にアルゼンチンに於て農工兩界に於て相克關係の擡頭を見てゐるも之がためである。勿論戰爭の壓力は右工業化の程度を促進する事は疑問の餘地が無い。兎に角、今次戰爭を通じて中南米の經濟は相當の變貌を示すものと見られる。



以上の中南米相互間の貿易強化並びに工業化の進展に關し英誌のGeographical Magazine 一九四一年六月十四日號に據れば、英國の中南米貿易に最も重大なる點は戦争によつて引き起された中南米相互貿易の進展化の外に中南米が歐洲より製品獲得が困難なため、中南米諸國の製造工業に一段と拍車かけしめたことである。この傾向は前世界大戰後急速な發展を示したが近年に至つては多くの日常生活品の製造工業にも大きな進展を示してゐる。しかして、この工業化運動は從來の中南米輸入品に根本的な影響を與へるだらうが、この點こそは英國輸出業者にまつて絶えず、中南米の需要品に注視を怠らざらしめるものである、とある。

更に一九四一年十月六日、紐育に於て開催された全米貿易評議會の席上、セントラル・ハノーヴァー銀行並に信託副社長代理アル・リッパ氏は

「今次戦争の最期化と共に中南米の工業化が急テンポを以て進捗しつつある點に鑑み、米國としては之を米國産業と競争關係に立たせてはならぬ。第一次大戰後中南米に於ける織物、皮革の一部製品及び工業の製品市場のある部分には中南米自身により蠶食せられたるが、斯る失敗を繰返へすことなき様警戒すべである」と述べてゐる。

また、中南米相互貿易強化を示す一つの徴候としてアルセンチンの一九四二年上半期に於ける對中南米貿易は前年同期に比し左の通り増大してゐる。(單位千ペソ)

中南米諸國向 計	一九四二年上半期	前年同期
内 キューバ	一五六、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
エクアドル	五、七五〇	一、一〇〇
チリ	一、八〇〇	四九〇
ペルー	二七、七〇〇	一三、五〇〇
ボリヴェア	八、六〇〇	四、〇〇〇
	一五、四〇〇	不明
	一九四二年上半期	前年同期
メキシコ	八、六〇〇	三、二〇〇
グエネズエラ	三、一〇〇	一、五〇〇
ブラジル	五〇、三〇〇	四〇、九〇〇
ウルグアイ	一二、八〇〇	一二、九〇〇
パラグアイ	九、五〇〇	七、三〇〇

(一九四二年十月一日アエノスアイレス發同盟電に據る)

結 言

以上、諸章に亘つて、過剰農産物に關し中南米が直面してゐる諸問題を考究して來たが、これを要するに中南米が原料生産國、特に農産國であるため、今次大戰の勃發に遭遇し、その弱點を暴露する

に至つたが之の弱點は今次大戰を通じて、自發的或は被強制的に即ち中南米諸國側に於ける回避の努力と米國側に於ける政治的援助政策により或る程度修正され、從て今次大戰終了後に於ける中南米經濟の相貌は多少變化する可能性あるものと考へられるがこの點は從來、輕工業品の輸出を以つて主要市場としてゐた我が貿易業者にとつて重大なる關心を要する所である。

然し、冒頭に於て述べた様に、米國が今次大戰を通じて西半球に對する覇權を確保し得るや否やの問題には多大の疑問がある。即ち中南米が一樣に原料生産國であり、それが特に米國の同種農産物と競争の關係にあるため、現在、殘されたる唯一の市場たる米國が完全にこれら農産物を處理できない缺點があるためである。これを行ふためには前章に於て論述した如く、中南米の工業化、或ひは産業の分散化は或は、米國側に於ける國內産業の再編成を必要とするものである。即ち、米國が徹底的に工業化して、その必要とする農産物を中南米の供給に依存するといふ方法であるが、現在米國內に於て絶大な勢力を示してゐる農産業者及び彼等の政治代表者たる農業ブロック議員がこれを默認する所の無いことは、過般のインフレ抑制政策に於ける農産業者の反對論を想起すれば容易に理解される所である。(但し戦争の壓力によつて、米國自身が一段と廣く工業化する事は容認しなげばならない) 然し、之れがために、米國の中南米に對する經濟的制覇が挫折するとは考へられない。周知のやうに、戦争によりその主要海外市場を喪失した中南米諸國にとり殘されたる市場は假令、不満足なものであつても、米國以外に無いからである。更にまた米國側としては、西半球連帶政策の手中、そこに船腹の問題が横つてゐても或る程度の犠牲を甘受するだらうからである。従つて、この點よりして、米國の中南米に對する經濟政策の成就如何は戦争長期化による中南米の經濟的苦惱と之に對する米國の對策如何にあると云つても過言でないだらう。



